

倫理講義 12 実存主義の思想 キルケゴール・ハイデガー

得点源 キルケゴールは、実存の三契機と単独者、主体的真理を理解しよう！

人間は絶望する生き物である。そして絶望をきっかけに3つの段階を経て、人間は自己の生き方を見つけるようになる。

第一が→ **美的実存** …快樂をひたすら追求

第二が→ **倫理実存** …そのむなしさから脱却するため道徳的に成長しよう

第三が→ **宗教実存** …自分の無力さ情けなさをさらけだし、神の前に立つ。

神の前に立ち→ **単独者** となる。



ニーチェは、ニヒリズム、超人、運命愛、永劫回帰、奴隷道徳を理解しよう！



① **ニヒリズム** の世界…絶対的な価値がない、意味も目標もない世界と考える。意味のない世界の繰り返しを→永劫回帰という。

積極的ニヒリズム … **超人** として、ニヒリズムを運命として受け入れ (**運命愛**)、自分で価値を創造していくあり方。

消極的ニヒリズム …ニヒリズムに絶望し、ニヒリズムを乗り越えることをあきらめた状態。

② **奴隷道徳** …ユダヤ民族の **ルサンチマン** (怨恨感情) によりユダヤ教が成立。ユダヤ教を母体にキリスト教が生まれたが、ニーチェはキリスト教の思想を弱者の論理と解釈し、「奴隷道徳」と呼んで批判した。

満点の極意 ヤスパースは、限界状況の意識を理解しよう！

罪・戦い・死・苦しみを、ヤスパースは **限界状況** という。人間にとって限界状況は、避けようと思っても避けられないものなので、受け入れるしかない。例えば、癌で余命2ヶ月を宣告されたとき、癌による死を避けようと思っても避けられないので受け入れるしかない。この時、救いを求めて、あえぎ苦しむ人間は、大きな壁 (限界状況の意識) の向こうに **神** を直感するという。これが、ヤスパースのいう **超越者** なのだ。そして、限界状況に打ちのめされて、超越者と出会い、また限界状況を自覚して、実存にめざめた者どうしの関わりを実存的な交わり、つまり理性と愛をもって真剣に問いかける交わりという意味で「愛しながらの戦い」と表現した。

サルトルの自由と責任

人間はもともと **自由な存在** として生まれてきた。自由とは、選び、決断し、行動する自由のこと。だから、「自分になる」(大学へ進学したり、科学者になったり、職人になる) ことが可能なのだ。

本質 があるということは、何ものかになることが決定されていることになる。例えば、柿の種は柿の実がなるという本質があるから、柿の種が育てば柿の実になるというように。

されど、人間には**本質がない**。すなわち人間は**自己の存在を自由に作り上げていく存在** (未来に向かって自らを投げるという意味で、人間を**投企的存在**という) である。**サルトル**はこのような人間のあり方を「**実存は本質に先立つ**」と表現した。だから、ある一定の制約はあるものの、教師になることもできるし、大工にもなれるし、医者にもなれる。教師になって、初めて教師の生き方が決定される (運命づけられる)。しかし、人間はこの自由から逃れることはできないという意味で「**人間は自由の刑に処せられている**」と表現した。

アンガジェマン …自己拘束と社会参加…人間は、社会集団にみずから進んで関わることで、逆にその社会集団の決まり事に拘束される。同時に社会に影響を及ぼす存在。



ハイデッガー

人間は「**死へとかわる存在**」である。なのに、現実社会を見ると、そんな自覚をもって生きる人間なんてほとんどいない。ハイデッガーは、死へとかわる存在者であるという自覚を忘れ、**日常に埋没してしまい、個性を失い、匿名化された人々**のことを→**ダス・マン**と呼んで批判した。

つまり、

世界-内-存在 (意味をもった世界や様々な道具や他の人間と関わり合いながら存在していること) として性格づけられた **現存在** (ダーザイン。人間のこと) は、本来的あり方と非本来的あり方を流動的にしている。

・ **フッサール** …現象学の祖。実在すると私たちが素朴にみなしているものは、私たちの意識との関わりにおいて存在している。現象学は、意識にあらわれる現象をありのままに記述する学問的営為である。ハイデッガーに大きな影響を与えた。メルロ＝ポンティは割愛した。

センター過去問演習

2019 追試 倫理・政経 キルケゴールの思想

次のア～ウは、キルケゴールの思想を説明した記述である。その正誤の組合せとして正しいものを、下の①～⑥のうちから一つ選べ。

ア ヨーロッパの人々が、生きる意味や目的を失ってしまったのは、キリスト教道徳に原因があり、そのキリスト教道徳は弱者が強者に対して抱く「ルサンチマン」に基づいている。

イ 人は倫理的に生きようとする、欲望を「あれも、これも」満たす生き方にとどまることはできず、自らの生き方について「あれか、これか」の決断を迫られざるを得ない。

ウ 人間は自由な存在である。だが、自由に自分の生き方を決められるということは、その選択の責任がすべて自分にかかることを意味する。人間のこのあり方は「自由の刑に処せられている」と表現される。

① ア 正 イ 正 ウ 誤

Pain is inevitable Suffering is optional

- ② ア 正 イ 誤 ウ 正
- ③ ア 正 イ 誤 ウ 誤
- ④ ア 誤 イ 正 ウ 誤
- ⑤ ア 誤 イ 正 ウ 誤
- ⑥ ア 誤 イ 誤 ウ 正

正解→アはニーチェの思想。ウはサルトルの思想。正解は④

2016 本試 倫理・政経 ハイデガーの思想

次のア～ウのうち、ハイデガーの思想についての説明として正しいものはどれか。その組合せとして最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

- ア 人間は、存在するとはそもそもいかなることかを問うことのできる、唯一の存在者である。私たちのそうしたありようは、現存在（ダーザイン）と呼ばれる。
- イ 人間は、それ自体で存在する事物（即自存在）とは異なって、未来に向けて投企しつつ、自己を意識する、私たちのそうしたありようは、対自存在と呼ばれる。
- ウ 人間は、世界のなかに投げ出されており（被投性）、そこで様々な事物や他者と関わりながら日常を生きる。私たちのそうしたありようは、世界内存在と呼ばれる。

- ① ア ② イ ③ ウ
- ④ アとイ ⑤ アとウ ⑥ イとウ ⑦ アとイとウ

正解→⑤

イはサルトルの思想。

正解は⑤ ア 正しい。人間はモノとは違い、存在の意味を問うことができる。そのような存在の意味が開示される場という意味で、ハイデガーは、人間を「現存在(ダーザイン)」と呼んでいる。イ 誤り。サルトルの思想。ウ 正しい。人間はモノとは違い、周囲の様々なものと関わりつつ生きている。こうしたあり方をハイデガーは、世界内存在と呼んでいる。

2014 本試 ハイデッガー

次の文章は、大衆社会と科学技術を批判したハイデッガーの思想について説明したものである。【 a 】～【 c 】に入れる語句の組合せとして正しいものを、下の①～⑥のうちから一つ選べ。

ハイデッガーは、人々がうわさ話に夢中になり、新奇なものを求め、なんとなく曖昧に生きている日常的なあり方を【 a 】と呼んだ。こうしたあり方から本来の自己へと至るには、【 b 】のただなかで、自己の死の可能性を直視することが必要だとした。後に彼は、科学技術のあり方を考察し、そこでは人間も含めてあらゆるものが利用されるべき材料とみなされていることを批判した。彼はこうした状態を【 c 】の喪失と呼び、そこから脱却する道を模索した。

- ① a ルサンチマン b 絶望 c 故郷
- ② a ダス・マン b 不安 c 人倫
- ③ a ルサンチマン b 不安 c 故郷
- ④ a ダス・マン b 絶望 c 人倫
- ⑤ a ルサンチマン b 絶望 c 人倫

- ⑥ a ダス・マン b 不安 c 故郷

正解→

2017 本試 倫理・政経 現象学者の思想

代表的な現象学者の考えとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① メルロ＝ポンティによれば、人間は気がつけば既にこの世界に投げ出されている。現象学は、この根本事実に基づいて、誕生とともに死へと向かう存在としての人間を分析する学問的営為である。
- ② フッサールによれば、実在すると私たちが素朴にみなしているものは、私たちの意識との関わりにおいて存在している。現象学は、意識にあらわれる現象をありのままに記述する学問的営為である。
- ③ メルロ＝ポンティによれば、世界には何らの意味も目的もなく、一切は偶然的に存在している。現象学は、そうした不条理な世界のなかにあっても人生の価値を問いながら真摯に生きることを目指す立場である。
- ④ フッサールによれば、自然的態度において人は世界の存在を信じている。現象学は、そうした自明な判断を括弧に入れることによって、あらゆる物事の妥当性を懐疑して、学問の絶対的現実性を否定する立場である。

正解→② 現象学を創始し、ハイデガーの師としても知られるフッサールは、実在についての素朴な信念について判断停止（エポケー）し、それらが意識にどのように現れているかを詳細に記述することに徹するべきだと論じた。

- ① ハイデガーの思想についての記述。
- ③前半はニーチェ、後半は作家カミュについての記述。
- ④フッサールの現象学は、不確実であった学問を確実な土台の上に据え直そうとする営みである。